

近世編

第一編 近世の放浪

近世の放浪は、その本質からいへば、一種の探險である。それは、未知の世界への冒険、そして、自己の限界を越えようとする人間の衝動の表現である。この放浪は、地理的な移動だけでなく、精神的な探求も含んでいる。放浪者は、異文化との接触を通じて、自己の存在意義を問い、そして、新たな価値観を構築しようとする。この放浪は、人類の歴史を通じて繰り返されてきた行為であり、それは、人類の進歩と発展の原動力の一つとして、重要な役割を果たしている。

放浪の歴史は、古くからある。古代の商人や探検家は、未知の世界への冒険を求め、遠くまで旅立った。中世には、十字軍の遠征や、探検家の冒険が盛んに行われた。近世には、大航海時代の開拓者や、探検家の冒険が、人類の歴史に大きな足跡を残した。現代には、探検家の冒険は、科学の発展と、人類の進歩の原動力として、重要な役割を果たしている。放浪者は、異文化との接触を通じて、自己の存在意義を問い、そして、新たな価値観を構築しようとする。この放浪は、人類の歴史を通じて繰り返されてきた行為であり、それは、人類の進歩と発展の原動力の一つとして、重要な役割を果たしている。

近世初期の春野

新しい村落の成立

浦戸一揆 長宗我部元親は戦国大名支配の体制を近世化するため、前述したように検地、あるいは城下町建設、掟書制定等懸命の努力をかたむけたが、年六十一歳、病んで伏見に死去した。慶長四年（一五九九）五月十日のことであった。時しも政局は豊臣秀吉死後きわめて流動的であり、嗣子長宗我部盛親にとって、この危局を乗り切めることは容易ではなかった。

はたして盛親は翌五年（一六〇〇）九月十五日の関ヶ原の戦いに、西軍西軍田三成に加担して敗北する。急遽海上を浦戸城に帰った盛親は、籠城を決定して家臣を浦戸城に召集する。土佐国各地から続々浦戸城に集合したいわゆる一領具足たちは、大いに氣勢をあげて戦意を高めたが、盛親は上方からの連絡で、考え直して徳川家康に謝罪のために上阪する。こうした動揺がよい結果となるはずはなく、盛親は捕えられたうえ土佐国は没収され、山内一豊は改めて土佐一国の領主として入国することになる。

浦戸城に籠って氣勢をあげた一領具足たちの前に、城受け取りとして、まず井伊直政家臣鈴木平兵衛らが介添えとなって、一豊の弟康豊が現われたのは同年十月十九日であった。一領具足たちは激しくこれに抗議して、鈴木平兵衛らを雪隠寺に約五十日にわたって閉じ込め、せめて土佐半国を長宗我部氏に与えられたいと談判したが、弁口と駈引きに勝れた平兵衛は、長宗我部氏の旧臣のうち家老大身衆を味方とし、ついに一領具足たちを破る。十二月三日であった。戦いは浦戸城西方の糠塚で行なわれ、敗北した一領具足の首二百七十三は、大坂城の

家康の許に送られる。土佐の歴史で有名な浦戸一揆と云われるものである。この一戦によって、山内政権は一挙に確立し、翌慶長六年（二六〇一）正月八日、山内一豊は浦戸城に入城し、いよいよ領国経営に精力的に取り組むことになる。

ところで、一領具足についてはすでに前述したが、これが長宗我部氏の勢力を支える重要な基盤であったことは、世に隠れなかったため、新国主山内氏は入国に当りその帰服に努力している。たとえば井伊直政が前述鈴木平兵衛に宛てた命令の一項に、

一、山内対馬守殿（一豊）より、一領具足身。上落着の儀、誓詞を以て申越され候由に候。定めて此上は申分有るまじく候哉「土佐国地方史料」。

とあって、一豊が一領具足の身の上に付いては責任を負うから、心配しないようにと云うのである。また同史料によれば、康豊も浦戸一揆のまだ鎮定しない時、「在々所々の百姓山中へ隠れこれある由に候。然れば当国法度の事、衛門太郎殿（盛親）御置目の如く申付くべく候間、又々在所へ立還り尤もに候」と、これまた同様に一領具足たちの帰服に努めている。これらの努力は完全に実を結ばなかったが、いずれにしても浦戸一揆によって結着は付き、山内政権は動き出すこと前述のようである。

さて春野地区には前述のように一領具足が多く、また浦戸城とも至近の距離にある。かならずや浦戸一揆に参加し、長宗我部氏の末路に殉じた者も、内ノ谷の北代市右衛門のように少なからずあったと思われるが、伝えられたものは多くはない。あるいは、伝説によれば（土佐市用石故松沢繁吉氏）、康豊は浦戸城下の浦戸湾口で入城を拒否された後、西に廻って仁淀川口を廻り、用石（土佐市）と新居（土佐市）との境に近い十文字の淵の上み手、ざぜんが鼻に上陸したというのであるから、ここから浦戸城に向って東進したとすれば、比較的早く春野地

区は山内氏に帰服したとも考えられ、その犠牲が少量に食い止められたかもわからない。もっとも後述引用の「吾川郡本田新田地地帳」高知市甲藤勇氏所蔵によれば、春野地区には郷士が比較的少ない。もっとも仁ノの小島氏は、「長宗我部地帳」にも出る有力な一領具足層であったが、これは浦戸一揆には参加せず、その勢力を温存して郷士となり、前述「地地帳」以下略称するに、

四拾五石四斗八升 小嶋惣九郎 領知

ほか四名の小島氏がある。小島氏のような場合は少なく、春野地方でも打撃を受けあるいは滅亡、退転した一領具足がむしろ多かったであろう。在地を根底から揺さぶった大事変であったからである。

なお一領具足を破滅に追いやった長宗我部氏の家老重臣たちの中に、町野又五郎「土佐物語」の名がある。これは「弘岡地帳」の

西ノ城南ノ岡三日懸テ
一、三十式代 出州六代
上屋敷 内五代荒

同（西ノ城ノ村） 新介居
町。又五郎 給

および

西ノ城ノ南本丸ヨリ南古道
一、四代 久荒

西ノ城 町又五郎抱
散 田

の町又五郎と同一人と思われる、かつて家老重臣級として、吉良氏滅亡後の弘岡方面に睨みを利かしていたものが、この長宗我部氏の最後に当って、見解を異にして一領具足を破ったものである。

兵農分離—知行割 話しを前に返そう。長宗我部氏の滅亡が打撃となるのは、一領具足よりもむしろこれを破った家臣大身層であった。主家滅亡によって浪人となった彼らは、すべて土佐国を退去して他国に仕官を求めな

